

平成26年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	フィールドワークで得られるデータ・情報の利用・活用に関する応用地理教育的研究
------	--

研究代表者

氏名	中村康子	所属	地理学分野	職名	講師
----	------	----	-------	----	----

研究分担者

氏名	椿真智子	所属	地理学分野	職名	教授
	青木 久		地理学分野		准教授
	古田悦造		地理学分野		教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

教員養成大学の地理学教育に対する批判として、一般的・包括的な内容は学ばれているものの、より突っ込んだ学習がなされていないとの指摘がある。そして、免許法上の最低科目の履修だけでは中等地理教育で扱う知識・技能の習得が不十分であり、解決には実験・実習系科目の提供が必要との主張が展開されている。しかしながら、関係する科目の免許取得希望者に対して、現実的に実験・実習系科目の提供することは難しい。一方で、教員養成大学における地理学の専門立場から、上述の教員養成のニーズに応えるための基本構成要素の把握することが必要である。

そこで、本研究は、その手はじめとして、教育系で地理学での卒業研究を希望する3年生が必ず履修する臨地研究の授業を主たる事例とし、実世界を直接対象とするフィールドワークから得られるデータ・情報を利用・活用し、地理的な実態の理解に至るプロセスを、それぞれの分担に従って、明確にした。

ここでは、写真1のある固有の滝に着目し、その後退速度に着目した調査・研究(担当:青木)を取り上げ、成果を報告する。この例では、前提として、地形学がどのような学問であるのかについての理解がまず必要となる。そして、①模式化された地形発達(図1)をもとに研究対象が何であるのかを把握できること、②現地の地形環境に対する関係する研究成果の利用、③実世界の測量成果である地形図を資料として間接的に得た河川縦断形を描くためのデータ、④現地の河川での測量結果(写真2)の4つが重要であり、それらをグラフ化することで論理的に現象が理解され、滝の後退速度が得られた。この研究の学術的な到達点は「地形環境が変化速度」の把握にある。そして、そのことは日常的には変わらないと思われる地形環境が変化するものであること、すなわち、基礎研究の社会的な意味の理解に至る。

フィールドワークは経験を通してのみ学ぶことができる暗黙的な知識であるため、1人の学生が経験できるフィールドワークは1つ程度に限られる。今年度の研究は、具体的な個々のフィールドワークの事例を明確にすることにとどまったが、それでも各自の経験するフィールドワークがどのようなものであったのかを学生間で共有できる状態にするという点まで到達できたと考える。これらの事例を検討材料とい、地理教育に応用できる形態にしていくことは、今後の課題としたい。



写真1 麻苧の滝 (2014年8月撮影)

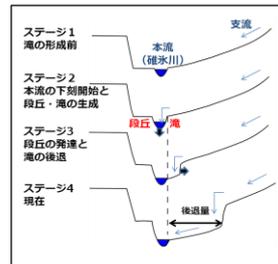


図1 滝の形成モデル



写真2 地形測量の様子

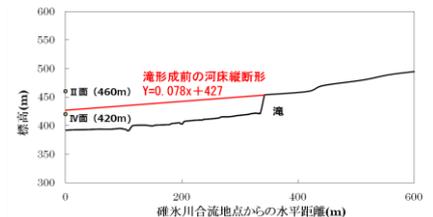


図2 麻苧の滝を通る支流の縦断形

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

本年度の成果については、報告書を冊子にとりまとめる。また、個々の事例を検討したうえで、7月19・20日に奈良教育大学で行われる日本地理教育学会で報告する。また、分野のHPを通じて、教育活動としても発表する手立てを検討する。